



四 五キロ地点

巨大なショッピングセンターが見えてきた。これまでずっと海沿いの道路を走って来た。そうだ、さっきは魚市場を通り過ぎたんだ。川から干潟を見ると、鳥がえさをついばんでいる。おもむろに羽を広げ、飛び去っていった。駐車場には車がたくさん止まっている。買い物客か。それともこのマラソン大会の応援者か。

「頑張って、退職サラリーマン」沿道の人が応援の声が掛った。誰に声を掛けているのだろう。退職は俺のことだ。何で、俺が退職しているのがわかるのだろう。サラリーマンは俺のかつての仕事だ。もう、退職している。退職して何年だ。一年か。二年か。いや、もっとずっと前だったような気がする。本当に、ずっと前だったのか。昨日じゃないのか。そう言えば、昨日、昔の部下が退職会を開催してくれたんだ。退職会？俺はその翌日にマラソンに参加しているのか。そんなことはあり得ない。退職は春だ。じゃあ、今は？今が春なのか、夏なのか、秋なのか、冬なのか、季節さえもわからなくなった。まあ、いいか。季節が俺に合わせればいいんだ。季節とともに走ればいいんだ。

こんなにたくさんの選手が走るだなんて。由美子は驚いた。フルマラソンは初めての出場だ。これまで、十キロやハーフマラソンは走ったことはある。フルマラソンも走りたいとは思っていたが、走りきれないのではないかという不安で、これまで、今、一步、踏み出せないでいた。だが、今回は地元の大会。万が一、ゴールできなくても、自宅まで帰ることは可能だ。やってみよう。それに走るコースがいい。海沿いを走るコースだ。海は見慣れているものの、走って見る海は、特別、身近に感じられる。

以前、海沿いのコースを歩くウォーキング大会にも参加したことがある。その時に、橋から見た海と、このT市のシンボルの山が素晴らしかった。車から眺める風景とは異なる。視点が違う。スピードが違う。走れば、体全体で海を、山を感じ、受け止めることができる。そのコースを走れるのだ。それと、第一回目の大会と言うことが魅力だ。第一回は二度とない。第一回と第二回・第三回とでは意味が違う。ただし、参加者の立場から言えば、第一回目は、主催者側が初めてだということもあり、運営にやや不安がある。それでも、第一回目という魅力には負ける。

由美子は募集開始日の当日に申し込んだ。初めての大会、しかも人気のフルマラソン、六時間と初心者でも完走可能な制限時間。そのことで、申込者は殺到した。申し込み期間は六か月間であったが、一か月も過ぎないうちに、定員がいっぱいとなり、すぐに応募が締め切られた。由美子は当日に申し込んだので、当選した。由美子が通っているジムのメンバーから聞いたところでは、申し込みができなかった人が結構いるらしい。とにかく、第一関門は突破した。後は、マラソンコースでの関門だ。だが、この関門はハーフの距離で三時間、フルマラソンで六時間と他の市民マラソンと同様の制限時間だ。練習すればなんとかなる。はずだ。だろう。かな。

由美子がこの大会に申し込んだのはもうひとつの理由があった。男女同数の参加枠だったからだ。通常、マラソン大会は男性が多い。割合で言えば、二対八、三対七ぐらいだ。女性の方が圧倒的に少ない。女性の方が運動をする機会が少ないのか。いや、そうでもない。家の近所の道路

では、ウォーキングをしているのは男性よりも女性の方が多い。由美子の女友だちもジムに通っている。ジムのダンス教室では、ほとんど女性だ。女性は運動が嫌いだということではない。むしろ、健康を意識して、運動をしているのは女性だ。やはり、フルマラソンということで女性が尻ごみをしているのだろう。男性のように無鉄砲さはない。安全志向だ。堅実だ。だから、下見は必ずする。由美子もこのコースを、一応、走ってみた。準備万端だ。

通常のマラソン大会だと女性の参加者が少ないので、スタート時点で多くの男性に囲まれてしまう。だからと言って、何をされるわけではないけれど、やはり、自分よりも体の大きい男性に囲まれと圧倒されるし、圧迫感がある。それと、男性特有のにおい、おっさん臭さも嫌だ。スタートする段階で、その臭いで辟易してしまう。走る意欲がそがれてしまう。

また、走り出しても、後に男性がいると、何だかお尻やふとももなど、体全体を見られているようで恥ずかしい。特に、マラソンでは、ランニングシャツにランニングパンツを着ているだけ。少しでも体を軽くしようと薄着にしている。体を隠しているものは、ほとんどない。長袖やタイツ、スカートを履くことはあっても、体に密着している。別段、見られても恥ずかしいわけではないけれど、じろじろと好奇の目で見られると、不愉快である。そのせいか、最近は、女性限定のマラソン大会も増えている。これがこれまでのランニング大会に参加した時の感想だ。

それに比べて、今回は、男女同数の申込者数の募集をしている。それでも、やはり、女性の参加者が少ないのではないかと危惧していたけれど、最終的には、男女ほぼ同じ参加者数になったと主催者が発表した。今日の状況は、ピンクや赤など、可愛らしい服の女性が目立つ。実際の参加者もほぼ同じだ。多分、由美子と同じ考えを持つランナー、そう、ランニング大会には男性が多すぎる、もっと男性を絞り、女性の参加者が多いほうが華やぐし、女性が参加しやすい、と考える人が多かったのだろう。

特に、男性は、オリンピックを目指すわけでもないにも関わらず、自分の記録更新を目指して、必死になりすぎる。スタート地点から飛ばし過ぎて、後半、歩いたり、沿道で屈伸や座りこんでいる人をよく見かける。その点、女性は、無理をしない。無理というか、自分の力を知っている。同じスピードで、ずっと走り続けたほうが、タイムも早いし、体への負担も少ない。まさに、童話のうさぎとかめ、だ。

のろまなかめだって、座りこんで、うなだれているうさぎを横目に見ながら、うさぎよりも早くゴールできるのだ。時計を見る。九時三十五分を過ぎている。一キロ七分ペースか。このペースで走り続けていけば、十五時には余裕でゴールできる。はずだ。約六時間の小旅行。それも自分の足で。車から見慣れているこの風景が、人が走る視線で初めて見る風景は、どんなものだろうか。期待しながら由美子は走る。

目の前に背広姿のランナーがいる。最近のマラソン大会は、ユニークになった。自己主張の大会だ。みんな、思い思いの服装で大会に参加している。単に、走ることだけが、自己タイムの更新だけが目的じゃない。マラソン大会と言うお祭りに参加しているのだ。それも、ただ見ているだけじゃなく、走ると言う参加型なのだ。

でも、自分もアニメのかっこうをして走れと言われれば抵抗はある。前を走る背広姿のランナーはどういう気持ちで走っているのだろうか。折角の休みなのに、仕事着である背広を着るなんて

考えられない。プライベートと仕事をはっきりと区別するために、走っているようなものなのに。いや、目の前のランナーは自由業なのかもしれない。普段、背広なんか着ないから、こうしたマラソン大会というハレの日に、正装しているのかもしれない。それなら、あたしと同じか。

それにしても、背広のランナーはゆっくりと走っている。周りを見ながら走っている。沿道に知り合いがいるのだろうか。追いついた。気になって、横顔を見る。へえ、意外に歳をとっている。六十歳は超えているだろうか。人と変わったコスチュームをするのは若い人が多いのに珍しい。いや、この人は気持ちが若いのだ。うらやましい。自分も歳をとっても、いつまでも挑戦する気持ちを持っていたい。

がんばれ、退職サラリーマン。がんばれ、由美子。

由美子は心の中で背広姿の男に応援の声と自分に声を掛け、男を抜き去った。ゴールはまだ先の先だ。

子どもは小学生を卒業した。中学生になると部活に入り、土曜日。日曜日も練習や大会で家にはいない。もう、昔のように、俺を頼ることは少なくなった。だけど、俺は、子どもに頼っている。子どもは俺を卒業し、俺は子どもにしがみついている。俺はおれの目的のために生きなくてはいけない。じゃあ、俺の目的は何だ。読書もする。音楽も聞く。だが、それは与えられたものだ。自らが動かなくては。自らが発信できなくては。吸収するのは、放出するためだ。吸収ばかりでは、いつかは、膨らみ過ぎた風船のように割れてしまう。その先には死しかない。

生に固執している訳ではない。でも生きたい。それならばどうするんだ。そうだ。走るんだ。若い頃やっていたランニングだ。だが、復活できるのか。おそろおそろ走り出した俺。すぐに息が切れ、太ももが、膝が、ふくらはぎが、アキレス腱が、痛む。だが、何もしないと心が、頭が痛む。どうせ痛むのならば、俺は前者を選んだ。走ることを選んだ。